

はは 姑・サツキ①

奥会津の介護事情を書く前に、認知症を患い、その後 10 年以上寝たきりの状態だった姑のことを書いておきたいと思った。

姑は平成 20 年に他界しているが、今も折に触れてその笑顔が甦る。

姑は大正 7 年生まれ。旧暦の 5 月に生まれたので「サツキ」と名付けられた。

姑の苦難はまだ乳飲み子の頃から始まった。

囲炉裏に落ちて大やけどを負ったという。野口英世は手だったが、姑は顔に深いやけどを負った。

健康保険制度の無かった時代だが、親はお金をかき集めてあちこちの病院で診てもらい、新潟や東京の大学病院にも行ったと聞いている。何度か手術をしてもらったそうだが、成功したとは言えず、やけどの跡は消えることはなかった。より良い医療を受けさせたいと、長兄は東京で事業を起こしてある程度成功を収めたそうだが、戦争に突入。そして召集され中国で戦死。

終戦当時、姑はすでに 27 歳。その後は治療を受けたとは聞いていない。女性としては致命的な顔のやけど跡、娘時代はさぞ辛い思いをしたらろうと想像できる。

しかし、ひねくれたり、いじわるな様子のところがない人だった。身内のことを良く言うのも気が引けるが、神仏を敬い、感謝の気持ちを持ち、年をとっても好奇心旺盛で、やけどの跡など全く気にならないくらい笑顔が素敵な女性だった。

これは私の想像だが、親や祖父母、家族のだれもが深い愛情を注ぎ、顔の傷以上に心が傷つかないように育てられたのだろう。兄妹たちも同様に、貧しいながらも愛にあふれた家庭だったのだろうと、勝手に想像する。

それでも、左頬のひきつったやけどの跡はずっと気にしていたのだと思う。写真を見直すと、ほとんどが右頬を向けて写っていて、若いころの写真が少ない。そのことに気付いたのは、姑が亡くなってから写真を整理していた時だった。

首傾げポーズをとって微笑んだ写真の姑はどれも右向き